

樹 提 菩

熊野古道にまつわる「虎杖」考

平成元年の熊野古道は、世界遺産の選定をうけた今日とは、その様相を一変しています。道中出逢う人とてなく、処によつては道に生い繁った竹や木の枝を、先達の新宮山彦グループの二人の方に切り拓いてもらって進まねばならぬ箇所もありました。道には「りんどう」が群集して咲いていました。

以下は、平成元年十一月一日、午前六時二十分、那智山青岸渡寺を出発して三時間、地蔵峠に到着して以後の記録であります。

さて大雲取越えで標高の最も低い(七百二メートル)地蔵峠(茶屋)到着が九時二十分、出発からの里程は八、七キロ。熊野古道案内のパンフレットの予定通り、三時間きっかりの行程である。ここでは大雲取地蔵尊三十三体を拜む。三十三観音になぞらえての数であろうか。

この間かなりの山坂を経てきたが、更に八百七十メートルの越前峠をめざす。里程は二キロ。若い亮英師(青岸渡寺・副住職)は、私を気づかかって常についていて下さる。

「ナム・カンゼオン・ボサー」と区切りつつ、吸う息、吐く息を調えようとするが、いつしか猛暑の折の犬のような息づかいになる私に、「大丈夫ですか」としきりに声をかけてもらう。紀伊のくに 大雲取の峰ごえに一足ごとに わが汗はおつ

と、斎藤茂吉の歌碑をみたのが九時三十分のこと。最高の越前峠登口にさしかかる地点には、かもしかの糞が落ちていた。

虎杖の おどろが下をゆく水のたぎつ速瀬を

むすびてのみつ

長塚節もこの地で喉をうるおしたのである。

そしてここへくるまでには、茶屋跡の名称が数多く連なっている。その多くは峠の名を冠しているが、登立、粥餅、地蔵、石倉等々の茶屋で、巡礼者が杖を休めて、湯茶や、甘酒、餅などで疲れをいやしたものである。我々は専ら、キャラメルやみかんである。

ところで、前記長塚節の和歌についてであるが、私は「虎杖」を地名であろうと記していたところ、国語学の泰斗、阪倉京大名誉教授からお便りをいただいた。

〔前略〕：ちようど今週の始めに小生も熊野古道(ごく一部)を歩いてきたので、特に興味深く拝読しました。先人の汗と涙がしみこんだ道と思うと感慨一入でした。

「虎杖」は「地名であろう」とさされていますが、これは「いたどり」です。長塚節も、いたどりの咲く初秋のころ、ここを通ったのでしよう。(ただし俳句の季は春になっています)：(後略)というのである。「虎杖」を地名としていた私は、何とも気恥ず

かしく、一方自分の書いたものを読んでいただいた上、御教示までいただいたことを嬉しく思ったが、その後、「いたどり」の読みが、かなり一般的であることを知って、改めて赤面した次第である。

ところで、当地のじつこんにしている俳人に、訂正かたがた電話をしたところ、何とも思わぬ読んでしまったが、これを地名としたのは明らかに間違いである。しかし、実はこの地名も全国に五、六ヶ所あるはずで調べておく、との返事であった。この方からは、後日大略次のような便りをもらった。

全国くまなく調べたら、もつと出てくるかも知れない。関東、東北地方にあるかと思つたが意外になく、また近畿以西はまだ調べていないが、私の知つたのは次の通りである。として

1、板取村。長良川が美濃市から二つに分かれているが、西側に分かれているのが板取川で、その上流に板取村がある。なお、この一帯の谷を、いたどり谷ともいう。

2、板取。福井県今庄町、国道三六五号線、栃ノ木峠を越えて今庄町に入ったところにある(古くは虎杖と書いた、いたどりの沢山生えていたことによる)。(角川地名辞典)

3、板取。長野県松川村、国道一四七号線の沿線、大町市の少し南にあるJR大糸線の、しなのまつかわ、に近いところ、虎杖と書いた。(同)

4、いたどりしんでん、板取

新田。三重県大宮町、詳細は不明。

以上、こんなことを調べてみるのも面白いものです、と結んであった。ところで、昨年十一月十六日の『京都新聞』には、次のような記事があった。

児童数が二人で、京都府内随一の小規模校、京都府竹野郡丹後町立虎杖小学校は、来春、明治二十三年以来の百年の歴史に幕を閉じて廃校となる、というのである。この学校は、天然鮎のそ上で知られる宇川上流の山間部にあるというが、やはり虎杖の自生の多いところなのであるか。

その後、巡礼の途中、このことを話題にしたところ、虎杖についていろいろな通称が出てきた。一般にはスカンポ、和歌山の新宮ではゴンパチ、広島ではタチンゴ、或いはタチンポという話であった。虎杖にも種類があつて、長塚節の歌つた虎杖が、これらの俗称のものと同じであるか否かは、後日に託することとする。

さて、次は高知県、室戸の出身の友人の話である。この地方では、たらの芽や虎杖などといった野の味わいになじんだものであるが、特に虎杖と淡竹を砂糖漬けにしたものを、村人たちが売りに来る。それを買って喰べた少年時代の味覚は今以て忘れられない、という。また、奈良県吉野郡野迫川の民俗で、虎杖をさつとゆがいて皮を剥き、薄塩で炊く。これを食膳に出された時、虎杖である由を指摘したところ、お客さんで分つたのは、あなた

が初めてです、と逆に驚かれた

といった話。

一方、諸橋轍次の『大漢和辞典』をひいた、当地の医師からは、ファックスが入った。「三才図絵、草木巻九に見ゆ、杖は其の茎を言う、虎は其の斑をいうなり」と。

また東京在の義兄に電話をすると、長塚節の歌集をもつており、これは明治三十六年の作品で、彼は十二年の生れだから、二十四歳の時の歌である、とのことであつた。ついでながら、先日、百歳の高齢で亡くなった、アララギ派の歌人、土屋文明と斎藤茂吉、そして武藤善友の三人が、昭和十四年に、熊野古道を歩んだ由のことも伝えると、長塚節の歌集とあわせて、文明の歌のコピー。茂吉の歌は筆写してそれぞれ送ってくれたので、抜粋する。

長塚節「まつかさ集 其一」
真熊野の 熊野の浦ゆ
てる月の
ひかり満ち渡る
那智の滝山
人みなの見まくの欲れる
那智山の
滝見るがへに
月にあへるかも

「さらに小雲取峠といふにかかると、(以下略)」
真熊野の山のためけの
多芸津瀬に
濡れ濡れさける
虎杖の花
土屋文明 「放水路」
ま熊野や 昔平清盛が
ゆきけむ道も
あれにけるかも

草の下に 或いはかくるる
石の道
千年の苔の
おろそかならず
幾世の人 幾世かさねし
足跡の上に
我が一日の
足跡の消ゆべし
斎藤茂吉 「歌集 ともしび」
熊野越 其一
やま越えむ
ねがひをもちてとどめなく
汗はしたたる 我が額より
この山は いやいよさびしく
なるらむか
焚火をしたる 跡さへもなし
熊野越 其二
紀伊のくに
大雲取を越ゆるとて
二人の友に まもられにけり
ゆふばえの
雲あかあかとみだりつつ
熊野の灘は 夜にわたりぬ
これらの歌から察してみると、昭和十四年には、熊野古道は正に潰れる運命にあつたことが分かる。現今の文化庁の肩入れがなかったら、とつくに通れぬ道となつていたであろう。

ついでながら、これはまた随分次元の低い話になるが、虎杖の読みの下らなかつた無知のてれ隠しに、落語も一言。
虎杖とは、阪神タイガースのバットではあるまいか、と……。このように、いろいろな触れ合いが、歩行に於てのみならず、紙上を通して、また歴史の上にも広がりをみせてゆくところに、徒歩巡礼の興趣は尽きないのである。